2002年4月23日第三種郵便認可（毎月3回5の日発行）
2024年1月19日発行　SSKW増刊通巻　6144号

SSKW

巣立ちだより

No.60

２０２４年新年を迎えて

巣立ち会理事長　田尾有樹子

まるで、ロシアンルーレットのようだと思った。

元旦の黄昏時、雑煮を食べ、うたた寝をしていた。最初に感じた揺れはゆっくりしたもので、徐々に大きくなり、そして収まっていった。最初の揺れからピークまでの時間が結構あったことから震源地はかなり遠いと感じた。テレビをつければ詳しい情報がわかると思いながらも正月からのこの出来事を直視する元気がなかった。

翌日回しにして恐る恐るテレビをつけたら画面は能登半島で起きたニュースでおおわれていた。倒壊した家屋の映像と死者数が２０名と報道されていたが、私たちは震災直後のこの数字が後に数倍に膨れ上がることを知っている。東日本大震災と異なり、津波の被害ではないので、倒壊した家屋の救助次第で、助けられる命が多くあるかもしれないとも思ったが一方で、道路の寸断で、救助がそう簡単ではないことも想像できた。避難所に避難している人たちの食料品の確保が十分にできないという報道もあり、改めて他人ごとではない現状に目を覆いたい気分になった。

この災害、特に地震の報道は次は私たちかもしれないといつも思う。いつかその順番が必ず回ってくると、データも示しているのである。今回は免れた。（石川県の方たちには本当に申し訳ないと思う。）しかしいつか来るその時のための準備を改めて確認をしなければと強く思った正月だった。

年始の挨拶もそこそこに三鷹、調布の災害時の食料品貯蔵庫を確認した。三鷹も調布も福祉避難所に指定されているうちの事業所は市役所に近いので、取りに行けるとは思っていたが果たして市役所にあるのかを改めて確認した。調布市は別に貯蔵庫があるがシンフォニーから歩ける距離にあるということが分かった。井戸を作ってはみたが給水のためには電気が必要なことも改めて感じた。非常用発電は３日分は確保してあるがその後電気が使えなければ水もなくなるということになる。井戸は昔のように手動でくみ上げられるポンプのほうがいいのではないだろうか。３日以上電気が開通しないときのためにそれぞれの建物の屋上にソーラーパネルを設置してはどうか。

今年は様々なことをきめ細かく、検討してできることを準備していきたいと切に感じている。われわれの想像を絶するような災害ならば潔くあきらめよう。しかし、あの時思ったことをしていれば…ということだけはなくしたい。

それが今年の決意である。

長野敏宏先生の「覚悟」に学ぶ

「病床ゼロ」だけではなく

巣立ち会では、東京都から受託している精神障害者地域移行促進事業の一環で、毎年「地域移行関係職員に対する研修」を行っている。今年も各地で先駆的な取り組みを行う方々にご講義いただいた。

オンデマンドでは、「『地域移行』を本気で考える」と題して、愛媛県愛南町にある御荘診療所の長野敏宏先生にお話しいただいた。長野先生は2003年に単科の精神科病院・御荘病院（当時149床）の院長に就任し、徐々に病床を削減、2016年についに病棟を廃止した。一方で、介護サービスを運営するほか、NPO法人を立ち上げて柑橘類やアボカドの栽培から温泉宿の経営まで行って地域に働く場を作るなど、医療や福祉にとどまらない地域づくりを行ってきた。

心に留めておきたい言葉の相次ぐ講義に目が覚める思いだった。そのいくつかをご紹介する。

徹底して地域で

長野先生の実践を支えているのは「徹底して地域で暮らし続けていただく」という揺るぎない信念である。先生は「覚悟」という言葉を使う。「とにかく入院せずに何とかして地域で暮らし続ける。病院のロビーでスタッフがつきっきりで一晩過ごしたり、家に泊まることもずいぶんやってきた」と言う。曰く、「入院を避けることが長期入院を生まないための最善の予防策」。「地域移行を本気で考える」とはそういう一つ一つの積み重ねなのだ。「休息入院」などと言って、いつしか過剰な病床の存在を前提とした支援になっていないかと自分を省みた。

我々は簡単に環境に馴染み、疑うことをやめてしまう。様々な資源を作ってきた長野先生だが、「脱制度化」すなわち「制度につ（浸）からない」ことを大切にしてきたという。「医療・福祉制度の中で暮らすのが幸せとはとても思えない。医療・福祉の制度じゃないところで生きられないかということも含めて意識をしている」という言葉にはっとさせられる。私のように、制度ができたあとにこの仕事を始めた者はとくに心に留めておかなければならないと思う。自分だったら、制度に囲われて生きていく社会と、制度がなくても生きていける社会のどちらを選ぶだろうか。地域をつくるということは、窮極的には人と人との関係のあり方を変えていくことなのかもしれない。

長野先生は現在53歳。御荘病院の院長になったのは、今の私と同じ33歳のときだという。だから私にとってこの講義は「33歳からの20年という時間はこれだけの仕事をする時間になりうる」という話であった。比較するのもおこがましいが、これから自分がどういう仕事をしていくかという「覚悟」を問われているように感じた。そんな話を今伺うことができてよかった。　（植田）

人生の最後まで（を）地域で～おきな草の取り組みから

「人生の最後まで（を）地域で」～高齢精神障害者に特化したグループホームの実践報告～と題して、おきな草の元管理者である櫻庭孝子さんを講師としてお招きした。

おきな草の使命は、「加齢とともに身体機能の衰えが著しく、もはや一日の生活が自力では成り立たない状態にある高齢精神障害者を24時間、365日、介護、看護で支え、看取りまでを守備すること」である。おきな草に入居される方のなかには、数十年の精神科入院を経験されている方もいるそうである。スライドに映された入居者の方の写真は、退院時に介護タクシーに乗り込む際、不安でいっぱいという表情であった。ご本人にとっては、ある日突然、長年過ごしてきた病院を出て、見知らぬ場所に連れて行かれる、見知らぬ顔ばかりの環境に身を置くという感覚なのかもしれない。しかし、時間の経過とともに穏やかな笑顔になり、目に見えて表情が変化していったことが印象的であった。

また、おきな草が行なった支援として、胃ろうを増設した方が再び経口で食事をとるまでの取り組みが紹介された。このお話を伺うまで、私は胃ろうを造設したら再び経口で食事をとることはできないと思っていた。しかし、おきな草では専門職による支援のもとで時間をかけて再び経口で食事をとるまでに回復させたのである。私にとって衝撃的なお話であったとともに、一度失われた機能でも時間と手厚い支援により回復させることが可能なものもあると希望を感じた。服が汚れたら着替える、食を楽しむ等、当たり前のことを当たり前としてサポートするおきな草の取り組みは、理想的な支援であり、私たちが目指すべき支援のあり方でもあると思った。　（榎本）

おきな草の櫻庭氏

2002年4月23日第三種郵便認可（毎月3回5の日発行）
2024年1月19日発行　SSKW増刊通巻　6144号

ルポ死亡退院　～精神医療　闇の実態～　持丸氏講演を聞いて

今年の２月、NHKで「 ルポ 死亡退院 ～精神医療 闇の実態～ 」を見た時は衝撃だった。これまで、いくつかの精神科病院に問題があることは知っていた。滝山病院の事も多少は聞いていた。しかしその日テレビで見た内容は想像を遥かに超えていて、この令和の日本で起きている事とは信じられない最悪のレベルだった。

”滝山病院事件報道”はその後『クローズアップ現代』など、よりメジャーな番組に拡がり、これが日本の精神科医療の近代化が始まるきっかけになるんだと思った。

今回は、その番組を作ったNHKディレクター、持丸彰子氏の講演だ。事件自体にも強い関心はあったが、私自身永く映像に関わり、NHKの番組制作もしたので、制作裏話などもお聞きしたかった。

講演の内容はまず、テレビディレクターとはどういう仕事か、から始まり、福祉番組のディレクターをしていた氏が精神科病院の取材をするうちに、滝山病院からの内部通報を受け、取材し、この番組に至る経過を解説する。

番組では紹介しきれない、滝山病院内部の壮絶と言っても過言ではない実情を紹介し、その背景を詳細に解説する。日本の精神科医療の『発展』とそこに共存する『欠陥』の中で滝山病院が生まれ、利用され、必要悪として黙認され、巨悪化していくシステムを明らかにする。氏は最後にまとめる。『精神障害者を取り巻く“本人以外はみんな幸せ”システム』

講演中の持丸氏

最前線の修羅場を超えてきた氏の言葉はとてもリアルで感動した。だが、この話には続きがある。

この番組は、見る人に実情をとても上手に伝えている。だから当然、これをきっかけにマスコミの滝山病院批判が始まり、日本の精神科医療の近代化という掛け声の中、多くの入院患者の退院、地域移行が進み、滝山病院自体も改革が起こる、と思っていた。ところが、実際は滝山病院の入院患者の退院、転院は145人中30人程度しか進まず、未だに多くの入院患者が転院を希望したままで、院長も責任を取ってない。

番組を見た一般視聴者の中には、精神科病院に対して却って『怖い』印象を持ってしまった人もいるという。

日本精神科病院協会の山崎会長などは早速、反撃の狼煙を上げ、長期入院も身体拘束も必要であると堂々と公言する。

こんな期待を裏切る現状を見た時、入院患者の地域移行を目的とする私達巣立ち会の前にそびえる高い壁を感じる。改めて仕事の意義と困難さを認識し、それに対抗する意識と作戦を持たねばと思う。

（田中）

三鷹市　第三期障がい者(児）計画について

三鷹市では、「第三期障がい者(児)計画」（令和6～９年度）を策定中です。障がい者地域自立支援協議会委員として、私も検討の場に参加をしてまいりました。

協議会では計画策定の基礎資料となる「障がい者等の生活と福祉実態調査」を実施する段階から、検討を始めます。現計画の実行状況、評価はもちろんのこと、充足されていないニーズの実態を的確につかめるよう、調査項目や対象者の設定にも重点をおき議論をしてきました。特に入院中の精神障がい者、介護保険に移行する年齢の高齢障がい者が取り残されることのないよう意見をし、対象とされるようにしてきました。調査結果からも、入院中の精神障がい者に情報や支援が行き届いていないことは明白でした。

この調査の分析や、現計画の実行状況、委員がそれぞれの立場で背負っている当事者や地域の声から「誰もが尊重され共生できるまち」という計画のビジョンとそれを実現するための課題と基本目標を検討してきました。加えて、相談支援部会においてはライフステージによって切れ目のない支援をつなぐ体制づくりを目的として、子ども、成人、高齢者の支援機関との連携を図っており、見えてきた課題を協議会での議論につなげています。

計画には、精神障がい者施策の充実、地域生活支援の充実を基本目標の小項目に、特に重度化、高齢化に対応できる日中サービス支援型グループホーム等住まいや日中活動の場の確保を具体的に掲げるにいたっています。また、精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築を推進する精神保健福祉地域ネットワーク協議会からの意見具申をもとに、住まいの確保の他、ピアサポート活動の推進に関しても、計画体系に組み込まれるようにしています。

以上のプロセスを経て、策定された計画素案は、現時点（12月）でパブリックコメントが実施されています。あらためて全文を見直し、当事者や家族、三鷹の福祉をより良くしようと尽力している仲間たちの思いが、具現化されているか、委員の立場でもっと伝えられるべきことがあったのではないかという反省とともに、計画実行の一端を担うものとして、丁寧に検証をしながら、未来につなげていくことへの責任を痛感しています。

（大野）

2002年4月23日第三種郵便認可（毎月3回5の日発行）
2024年1月19日発行　SSKW増刊通巻　6144号

成蹊大学で巣立ち会の活動報告を行いました

発表の様子

昨年12月、成蹊大学の授業に巣立ち会がゲストとして参加させていただきました。文学部教授澁谷智子先生の「社会福祉概論」という授業の中で、巣立ち会の活動や利用されている方の体験談などを発表しました。

前半は理事長の田尾よりスライドなどを用いて巣立ち会の歴史や理念、現在の活動などについて説明し、後半は巣立ち会の「巣立ち風」、「シンフォニー」、「サザン」の各事業所を利用されている方からの発表をさせていただきました。大勢の大学生の前で、ご自身の体験を発表するというのは勇気のいることだと思いますが、５名の利用されている方々がご自身の経験や巣立ち会を利用しての感想、現在の想いなどを語ってくれました。

成蹊大学の授業に参加させていただくのは昨年に引き続き２回目でしたが、今回も約80名の学生さんが熱心に授業を受講してくれました。

授業の後にいただいた学生さんからの感想も、興味をもって聞いていただけたことがわかる内容でした。大学生という将来や人間関係などの不安が多い年代で自分自身を振り返っての感想、家族や友人など身近な人への寄り添い方などの感想、社会への働きかけや制度としての巣立ち会の取り組みに共感してくださる感想など、本当に様々な視点からの感想をいただきました。精神疾患は決して特別なものではないこと、一人で抱え込まず相談することの大切さ、人とのつながりの中で希望を感じ回復していくことなど、巣立ち会が大切にしていることを受け取ってもらえたように感じ、大変嬉しく思いました。

また、今回の活動を通して、現代社会で生きることの息苦しさや、誰もが生きやすい社会を創っていくことの重要性など改めて実感しました。それとともに、成蹊大学の学生さんたちを通して、今後の将来を担う若い世代への希望も感じることができました。

このような機会をいただいた成蹊大学の澁谷教授、受講してくれた文学部の学生の方々、快く体験発表を引き受けていただいた利用者の方々に深く感謝いたします。　（澤田）

恋人をつくろう！クリスマスパーティー　2023

12月3日（日）にクリスマスパーティーを開催しました。4年ぶりの開催でしたが、当日は約80人の方が都内外から参加してくださいました。

パーティーの内容としては、スタッフによるネイルサービスや、あっちむいてほい、順番に並ぼうゲーム、意思疎通ゲームなどを行いました。最初は緊張感のある雰囲気でしたが、参加している方々が場を盛り上げてくださり、少しずつ和やかな空気でパーティーを行うことができました。後半はフリートークの時間を設け、気になる方と話すなど自由に過ごせる時間をつくりました。

参加後のアンケートからは、「楽しかった」という意見があった一方で「女性が少なくてガッカリした」「次は行きたくない」など厳しい声もありました。そのため、次回開催時には、より多くの皆さんに「参加して良かった」と思ってもらえるような会をつくりたいと思います。ぜひ楽しみにしていてください。参加してくださった皆さん、ありがとうございました。　（吉澤）

参加者で記念撮影

2002年4月23日第三種郵便認可（毎月3回5の日発行）
2024年1月19日発行　SSKW増刊通巻　6144号

巣立ち会 賛助会からのお知らせ

【令和5年度分として　順不同】

馬部裕之様、星野和子様、日本太郎様、塚本優子様、姫本昭夫様、会田孝太郎様、山崎秀子様、株式会社ウィズユー　與那覇五重様、伊東曉子様、佐藤弘章様、村瀬信子様、木内朝信様、渡部譲様、楠原彰様、井上廣子様、三宅敬造様、関光彦様、櫻井錠治様、村田眞男様、村田眞様、田村博様、岡﨑秀昭様、白内美和子様、原島則夫様、医療法人社団欣助会　吉祥寺病院様、吉野壽夫様、飯野和典様、山田昭徳様、小林靖宜様、大島巌様、熊井秀哲様、阿部康代様、上田多美子様、青木鉄次様、荒井太郎様、松石俊郎様、株式会社　東部第一様、大坪節子様、菅野俊美様、倉持和宏様、森川あかね様、高坂正男様、村上建一様、佐々木いづみ様、三枝純様、長谷川病院デイケア科様、山田千代様、大谷さかゑ様、柏木彰様、高田美智子様

〈令和5年6月23日から令和5年12月26日到着分〉

たくさんの方々から、会費や寄付をいただいております。ご支援ありがとうございます。

巣立ち会の活動にご協力をお願いします。

賛　助　会　費

●年会費　　一口　　3,000円
●郵便振替　　口座番号　00140-4-542860
●加入者名　　巣立ち会 賛助会

巣立ち会 賛助会　会長　松岡恒夫

編集後記

やっとコロナが少しは収まってきたと思ったら、新年から地震や飛行機事故と今年は波乱の幕明けとなった。戦争に感染症、自然災害と取り付く島がないとはこんな時代のことだろうか。

混沌がまだ極まってないとすれば、この後何が起こるか考えると縁起でもないがちょっと怖ろしい気がする。

せめて心は整えておこう、希望は失わないでいようと思う。　（山本）

発行所　〒157-0072　東京都世田谷区祖師谷3-1-17
ヴェルドゥーラ祖師谷102
特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会
定価　50円
編集　社会福祉法人巣立ち会
〒181-0014　東京都三鷹市野崎2-6-42
電話　0422-34-2761
E-mail: sudachi-kaze@sudachikai.or.jp
http://sudachikai.eco.to/